

# 麗澤海外開発協会 (RODA)

## 第11回タイ・スタディツアー報告

竹原 茂 (ウドム・ラタナヴォン)

### 1. はじめに

毎年、麗澤大学と麗澤海外開発協会 (Reitaku Overseas Development Association: RODA) は10名前後の学生を連れて、タイまたはラオスへのスタディツアーを行ってきた。麗澤大学は夏休みに、RODAは春に約1~2週間、学生、若い職員の国際理解、国際交流、国際協力を目的として行っている。麗澤大学とRODAに心より感謝している。

私は大学で(現役当時)いつも学生に「百聞は一見にしかず」(Seeing is believing) または (An eye finds more truth than two ears) と聞かせていた。

今年2月10日から19日(10日間)、タイ北部チェンライ県にあるメーコック財団 (Mae Kok Foundation: MKF) で学生7名、教員1名、RODA事務局員2名、モラロジー研究所職員1名、私の計12名の参加でスタディツアーを行った。私は足が不自由だが、飛行場や長距離の移動では車いすを使い、メーコック財団などでは杖を使って歩く。

メーコック財団は1985年に活動をスタートした。1989年の夏、初めて学生、教員を連れて第1回目のタイ・スタディツアーを行った。当時は電気、水道、寝るところもなく、やむを得ずチェンライ市内の安いホテルに泊まった。チェンライ市内からメーコック財団まで(20km)はボートで川を上って行った。現在は市道ができ車での移動ができるようになった。電気も通ったが、水は井戸水、ガスはガスボンベなど、自分たちで工夫をした。宿泊施設も整い、大変便利になった。現在メーコック財団では教育支援を受けている子どもが23名、スタッフ5名が共同生活を行っている。

今回のメーコック財団(以下MKF)での学生の活動は、1.朝早くMKFの小中学生の子どもたちと一緒に自分たちの朝食作り、掃除の手伝い 2.MKFの歴史について勉強、MKFの代表アノラック氏(初代創立者である故ピパット氏の奥様)のお話、筆者(共同設立者)の講話 3.MKF施設内の視察 4.昼食作りの手伝い 5.タイの昼はとても暑いので屋外でのボラ

ンティア活動はできない。午後3時頃から土のう作りの手伝い(砂、砂利と石灰をバケツや袋で運ぶ) 6.休憩後、夕食の手伝い 7.自由時間(MKFの子どもたちと交流など) 8.別の日には晴天であれば車で北部タイチェンライ県の視察をしたり、市民、村の人々の生活や文化を観察したりする。少数民族の村を訪問し、村人との交流などをする 9.子供たちに日本料理(焼きそば)を作る 10.MKFに近い少数民族の子どもが通うバーンパーサー小学校で交流と昼食 ここでは子どもたちは年に1、2度しかご馳走がないのだが、学生たちがタイ料理を作って小学校に運び、食事を提供した。その他、今回のスタディツアーでは、学生が手洗いの啓発活動として紙芝居を日本で作成し、タイ語の歌詞をつけた手洗いソングを子どもたちに披露した。めったにないことなので子どもたちが大変喜んでくれたようだ。今回は私自身が3日しか学生と行動を共にしなかったため、ほとんどは引率の桑島朋子さんと益田晴華さん、内尾太一先生が学生の面倒をみてくれた。

サハサートスクールはチェンライ県でもっとも多く少数民族が通う幼稚園から小学校、中学校、高校までの学校で、約1200名が在籍している。毎年この学校を訪問し、校長のウィチャイ・ソンセーン先生から講話いただいている。国籍を持たない生徒、麻薬に関わった生徒、親が刑務所で服役中の生徒の話など、日本では聞けない移民(少数民族)問題は、麗澤大学の学生にショックを与えたかと思う。一方、メーコック財団からサハサートスクールで中・高と学び、チェンライ・ラチャパット大学に3名の進学もあった。1名は英語、2名は日本語を専攻している。その他今年メーコック財団から進学する4名のうち、3名はチェンマイやバンコクの大学に進学し、1名は神学校へ進学することになった。彼らは親戚の家に住んだり、奨学金などの支援を受けて勉強を続けている。ウィチャイ校長によると、サハサートスクールは一部日本のODAの支援を受けている。また、日本のNGOが運営する少数民族の寮(桜寮)もサハサートスクールの生徒を受け入れている(約150名)。

その後、私と麗澤海外開発協会事務局長の木下廣太郎氏は、チェンマイにあるピパット・チャイスリン氏の墓前に花を捧げに行った。ピパット氏はMKFとともに苦勞して作った仲間で、今回7年ぶりにタイへ行くことになり、どうしても献花したいと思っていた。できれば学生と共に訪れたかったが、時間がなくなかなか残念で心に残る。

学生たちと引率の教職員は次にチェンライ・ラチャパット大学日本語学科を訪問。ここは以前桑島朋子さんが約3年間日本語教師として教えた大学で、日本語学科の学生とグループディスカッションやタイ舞踊と盆踊りを披露しあって交流会を行った。

またルンアルン (暎) プロジェクトで代表の中野穂積氏と山岳民族の中高生、スタッフらと活動を続けた。活動の内容としては、1. プロジェクトについて中野氏の講話 2. アカ族の村に滞在 3. コーヒー農園訪問 4. 山岳地帯の少数民族の子どもが通う保育園訪問、交流 5. ルンアルン (暎) プロジェクトの生徒たちと交流 などを行った。

スタディツアー最終日にはバンコクにて麗澤大学OBOGとの会食が行われ、関口輝比古氏、増田裕介氏、村松正章氏、古川裕也氏、正木夢子氏らが集まった。私は参加できず、残念であったが、学生には大い

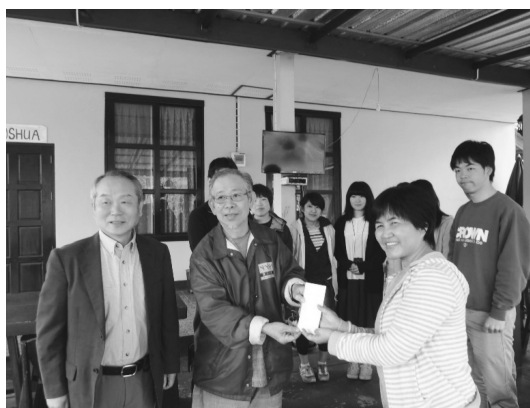
に刺激になったことと思う。

上記のように、学生、学園の教職員が現地で自分の目を見て、現地の人々の暮らしを体験し、共に寝泊りし、同じ釜の飯を食べることで、何かに気付いたのではないだろうか。短い期間ではあるが、自分の成長につながる素晴らしい経験や反省点がたくさん得られたことと思う。

今後の学生または日本人の国際理解、国際交流、国際協力について、いかにしてやっていけばよいか、まだまだ課題があると思う。可能な限り、一人ひとりを現地へ連れて行き、体験をさせること。多少の苦勞があっても、必ず自身のためになり、貧困とは、移民の人生とはどういうものを理解することができる。「百聞は一見にしかず」(Seeing is believing) である。大学の授業も今後世界の動向にあわせて行わなければならない。国際協力、国際貢献において、特に学生や若い人はできることから始めていってはどうか。RODAのように現地で若い人が活動していく際にも、マザーテレサの生き方に学ぶような活動、たとえば「目の前の一人ひとりを大切に」-たとえ個人の小さな活動でも、目の前の助けを必要としている人に何ができるだろうか。忍耐と努力が求められる。



2008年メーコック財団創設者故ピパット・チャイスリン氏 (左) と共同設立者である著者 (右)



2015年2月 メーコック財団にて 麗澤海外開発協会からの助成金を渡す著者 (中央)



チェンライ・ラチャパット大学日本語学科に進学したメーコック財団卒業生（右）



スタディツアーにて メーコック財団の子どもと折り紙をする麗澤大学生



スタディツアーにて メーコック財団で土のう作りのボランティア活動